

---

# ユー・エフ・オー UFO

川犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユー・エフ・オー UFO

### 【Nコード】

N4397G

### 【作者名】

川犬

### 【あらすじ】

山名岳は、バイトの帰りに何かが飛んでいるのが見えた。それは、どこからどうみてもUFOそのものだった。そして岳はそのUFOらしきものにひかりをあてられた。その途端に体がふわりとうきそのUFOに吸い込まれていった。

## ブローグ

目を開けた。身体を横にそらそうとする。

しかし身体が動かない。汗が手からじんわりと出てくる。

「・・・ここはどこだ？」

岳はもがいた。しかしまったく動けない。

なぜうごけないか。すぐにわかった。

目を開けたその時からわかっていて。

「なんだよこれ・・・。」

手や足や腹がくさりで縛られている。

そっと周りを見渡す。どうやら飛んでいるようだ。

窓のようなところから空が見える。暗い夜空だ。

壁を見る。白い。それは、触ってみると吸い込まれそうなくらい白かった。

目を再びつむった。岳は思い返した。

すべてはあの時からおかしかったのだ。

岳は夕方、コンビニのアル

バイトをしていた。

昼からずっとしているので疲れがたまっている。

また客が来た。帽子をかぶっているので顔が見えない。

「いらっしやいませ」

岳は元気よく言った。

しかしその客はクスクス笑っている。

「ひさしぶり！岳」

かぶっていた帽子をその客がとると、懐かしい人物が顔をだした。

特徴のある肌の黒さ、そして何より髪型が少しおかしい。

昔よりおかしさが増している。

「て、寺木」

そう、この人の名前は寺木学という。

「そうだ！」

・・・

少しの沈黙の後、岳はその沈黙を破った。

「で？客としてきたのか？」

「悪い？」

「…別に。」

岳は少し最悪な気分でした。

学はあまり好きではないからだ。

何と言ったらいいかわからないが、とにかく学はMなのだ。

そこどころがあまり気に食わない。

早く帰れ 早く帰れ と心の中でつぶやいた。

その願いは届くはずもなく学はニヤニヤしながら、いろいろ見まわっていた。

相手は客としてきているのでぶつとばせない。

「へーがんばってんじゃん」

こういうしゃべり方も好きではない。

岳は少し低い声で言った。

「早くしろよ」

「そんなこと言うんだ。俺様は客だぞ 客だぞ」

「わかってるよ」

「じゃあそんなこと言っちゃいけないよな」

「・・・はいはい」

ほんとうに面倒くさい。まったくどうだってんだ！

しばらくしてようやく学はレジにやってきた。

「これよろしく」

学はしょうゆ味の焼きおにぎりとハムのサンドイッチとコカ・コーラをレジにだした。

ピッ

ピッ

ピッ

「520円になります。」

学はまだニヤニヤしている。

昔からそうだ。みんなはこの顔がうざったらしくてよくいじめてたものだ。

しかし学はやはりMなので抵抗しない。

飯にしたとしてもよわよわしいものだった。

学はポケットから財布をとりだし、さらにそこから600円を取り出した。

「はいよ」

学から600円を受け取ろうとするが、学は手からそれを離さない。

「とつてみやがれ」

・・・。なんだか本気で学を殺したくなってきた。

しかしそんなことをしたらあたりまえだが警察行きだ。

あんなところへは行きたくない。

いったら戻ってきたときにまわりからへんな目で見られるからだ。  
学からなんとか600円をうばった。

そして岳はおつりの80円を取り出し渡した。

「おそいぞ〜」

本当の本当の本当の本当にぶっ飛ばしたい。

岳は手に力をおもいつきりいれた。もし爪が長かったら血が出ていただろう。

それぐらい力を入れた。が、おさえた。

おさえる おさえる、と心の中で唱えるようにいった。

「よお〜しじやあまたな〜」

学は出て行った。

岳は椅子に座りこみため息をついた。

どうしてああいいうざったらしいやつがいるんだ。

あんなやつきえてしまえばいいのに。

そう思い、再びため息をついた。

しばらくして、岳はある決心をついた。

そして、その決心を実現させるために店長のいる部屋までいった。

ドアまできた。その向こうには明らかに店長がいる。

しかし外人らしき人の声も聞こえてきた。

岳はそつと壁に耳をあて盗み聞きをした。

「デス。デスヨネ」

外人らしき人の声は、なんだかぎこちなかった。

「ええそつです。今夜ですね。楽しみです。サンプルが手に入りますからね、Mr・ホリユヤー」

どうやら外人の名はホリユヤーというらしい。

「オウ、ソノトウリデース。」

「ではさようなら。」

「See you」

岳はあわてて物陰に隠れた。

外人が出ていく。1人だと思ってたが2人だった。

1人は白人でもう一人は黒人だった。

おそらく、黒人はガードマンだろう。

とすると、なにか重要ななにかがあるに違いない。

岳は少しだけきょうみをもった。昔からこういうものを調べるのは得意だ。

しかし今は店長によろぐがあった。そのあとにそのことについて調べてみよう。

ドアの前に立ちノックした。

コン コン

「どーぞ」

中から店長の声がした。

岳はドアを開けると店長はすぐ近くにいた。

「なんだい？」

岳はおそろるおそろる口を開いた。

「あ、あの・・・少し言いづらいのですが・・・」

「ん？いいよ。いつてごらん」

「このバイトを今すぐやめてもいいですか？」

「え・・・」

店長は少し驚いた表情をした。

計算が狂う　そんな感じがした。

だがすぐに元の表情にもどりこういった。

「あ、ああ。いいけど少なくとも今日じゅうはやっててくれないかな。じゃないとこまるんだけど」

「はいわかりました」

「よしわかった。じゃあ残りの時間がんばれよ。」

「はい。ではしつれいしました。」

岳はドアを開け、でていった。

「ふう・・・これでよし」と

そうである。決心とはこのバイトをやめてもう学にはあわないようにすることである。

さつきすこし店長のようすがおかしかったが岳はあまり気にしなかった。

そしていつの間にかさつきの外人のことを忘れていた。

それと次のバイト先はもう考えてある。

次のバイト先はマクドナルドの店員にしよう。

CMでもよくやっている有名なハンバーガー店だ。

面接なども自分の得意分野だ。楽勝すぎる。

「よぉーし、やるまでがんばるぞ」

そうこのバイトは午後1時から午後7時までである。

今は5時半。あと1時間半ほどすればもうおしまいだ。

岳は精一杯働いた。

するとあつという間に時間が過ぎた。

岳はすぐに私服に着替え、コンビニの外へ出た。



「飯だ 飯だ！」

岳はいつもかよっているレストランにいった。

このレストランは特別だ。なぜなら安いのにおいしいからだ。しかも隠れたところ、いや人が少ないところにあるので客が少ない。なので、すぐに中に入り、カウンターのいすに腰掛けられた。

岳はメニューブックをとり、ペラペラとページをめくった。

そして注文する物が決まり、店員を呼んだ。

「ご注文はお決まりましたか？」

「はい、えーとじゃあハンバーグ定食で」

「以上ですか？」

「はい」

「それではしばらくお待ちください。」

岳はとたんに暇になった。

このレストランにはひとつだけ欠点がある。

それは時間がかかることである。

まあおいしく作るために時間をかけていると思うのだが。

30〜40分は暇になるだろう。

その間岳はケータイを取り出しゲームで遊びだした。

今ハマっているケータイゲームは（モンスターハンター）である。

ケータイ版なので多少PSPやPS2（プレイステーション2）よ

プレイステーションポータブル

り画質は落ちるがそれでもこの時間の暇つぶしになった。

岳はゲームに熱中しているといつの間にか時間が20分過ぎていた。

「お客様、お待たせいたしました。ハンバーグ定食です。」

その声で岳は料理が来たのに気づきケータイを閉じ、しまった。

そして肉をかぶりつきその後、飯を頼張る。

あっという間に平らげた。やはり、おいしい。

岳はレジで会計を済ませ外にでた。

「あーあもう8時か・・・」

岳は家に帰ることにした。

正確にいうと7時57分なのだがまあそういうことは誰もいないのでどうでもいい。

夜道をとぼとぼ歩いていた。すると真上に少しの違和感を感じた。街灯の明かりはあるのだが、月や星の光が感じていない気がするのだ。

なんだ？ なにか上にいる？

そんな気がした。

耳をすます。すると、かすかに飛んでいる音が聞こえてきた。

ブー  
ン

岳はなんだか胸騒ぎをした。

心臓の鼓動が早まっていく。

そして恐る恐る上を見上げる。

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
○

見上げた瞬間岳は硬直した。

正直見上げなければよかったかもしれない。

円盤型の飛行物体がじよじよに近づいてきているのだ。

「に、にげる――！！！！！！！！！！！！！！！！」

岳は思いっきり走った。

すると、円盤型の飛行物体も確実にこちらにむかってくる。

円盤型の飛行物体  
つまりUFOだ。

まさか本当に実在するとは思わなかった。

ありえない、ありえない、ありえない！！！！！！！！

いたいどうなっているのか。

どうして俺ばかり狙ってくるのか、岳にはさっぱりわからなかった。さらわれる！そう思った。

UFOの下部分が開き光が発射された。

それが岳にあたる。

すると岳の身体がふわりとかってに確実に浮かび上がってきた。  
これじゃあまるで映画のなかじゃあないか!!

「たすけてくれ!!!!!!」

そして岳はUFOに吸い込まれていった。

あまりの暑さに岳は目を覚ました。  
うつすらと目を開ける。

「こ、ここは？」

たしかUFOにさらわれたはずだ。

しかしこの風景はおかしい。ここは確実にUFOの中ではない。  
かといって日本ではなさそうだ。

見渡す限りここはインドあたりのような気がする。

そういえばさつきから右腕が少し痛む。

「なにこれ？」

見てみると黒い点が十字架になるように浮き出ているのだ。

いつのまに浮き出てきたのだろうか。

「おいぼうず！じゃまだよ！！」

気がつくとバイクに乗ったインド系の男の人が自分にむかって叫んでいた。

岳は横へ移動する。

インド系の男の人はこっちを睨みながらどこかへ行ってしまった。

ここはどうやら商店街のようだ。

だが岳はなにかおかしいと思っていた。

なんだ？この違和感・・・

なにかがおかしい。やはりどこかがちがう・・・

岳は最初から思い返しなおした。

俺は夜8時ぐらいにUFOにさらわれた。

そして気がつくとそのインドらしきところへきていた。

気を失っているときに連れて行かれたのだろうか？しかしそれはどうでもいい。

その後、俺は右腕に十字架になるように浮き出ている黒い点を見つけた。

それを思い出した岳は十字架になるように浮き出ている黒い点を手でこすったりしてみた。

しかし落ちない。

「これはいつたいなんなんだ？」

なんと懸命に消そうとしてもいつこうに消える気配すらない。

岳はしかたがなくそのあとのことも思い返してみた。

たしかあのあとインド系の男の人に文句を言われた。

いやさげばれた。

（おいぼうず！じゃまだよ！！）、と。  
？

岳はいつしゅん理解するのに苦労した。  
もう一度思い返してみる。

インド系の男の人に文句を叫ばれた。

（おいぼうず！じゃまだよ！！）

（おいぼうず！じゃまだよ！！）

（おいぼうず！じゃまだよ！！）

（おいぼうず！じゃまだよ！！）

岳の脳裏に何度もよみがえってきた。

その言葉だけが。

ここは日本なのか？インドなのか？

しかし日本にしてはやけに暑い。

いや沖縄か？しかしそれもあてはまらない。

沖縄はじめじめした暑さというものがある。

しかしここははじめじめというよりはからからなのだ。

その証拠にさつきから少し唇が渴いている。

しかもみんなインド系で服装までインドにいる人たちのようだ。

わけがわからない。  
岳はじょじょに混乱してきた。

また、岳はもう1つのあることに気がついた。

それは、他の人を見れば容易にわかってしまった。

それは、全員に共通するものだった。

誰一人としてここにいる人たちでそれがない人はいなかった。

なんと皆自分と同じ十字架のあの模様が浮き出ているのだ。

岳は恐怖にとりつかれた。

「ここはどこだ！みんな何者だ？だれか、だれかおしえてくれよお  
く！！！！！！」

もう岳は正常ではいられなくなった。

そして、

みんなの視線がこちらに降り注いできた。

目をつむってもわかる。

その目は・・・鋭く殺意に満ちていた。

まるで岳が獲物かのように視線は岳一点に集まっていた。

不気味に笑っている。

「「オシエテヤロウカ」」

どうじだった。

どうじにしゃべったのだ。

まるでつながっているかのように。

いやつながっているのだろっ。

岳の恐怖はもう限界値に到達しかけていた。

「助けて

たすけて！

TASUKETE!!

タスケテ——！！！！！！！！！！！！！！」

もう岳はあまりの恐怖で全身が震えだしている。

「うわ~~~~あ  
ああああ  
!!!!!!」

にげたかった。

もうここにいたら確実にこいつらに殺される！

しかし足が動かない。逆に座り込んでしまった。

焦りで汗を大量に出し、喉は完全に乾ききっていた。

眼は充血している。頭はきんきんにいたい。

このもうすぐ殺されるという恐怖が岳をここまでにしたのである。

「アハアハハハハハハハッ！！」

そいつらは狂っていた。

いや狂っているという語は適当ではない。

そいつらは

壊れているのだ。

それ以前にそいつらはいったい何者なのかもわかっていない。

じよじよに歩み寄ってくる。

囲まれてしまっているのもう逃げられない。

手遅れだった。

そして、岳は死すら覚悟していた。

「もうおわりだ……」

目を閉じる。

すると自然に今までの楽しかったことや悲しかったこと、うれしかったことやつらいことなどが浮かんできた。

ああ……いままでいろいろあったナ……

まだ父さんや母さんにすらさよならってしていない。

せめてでも最後にみんなにさよならだけはいいたかった。

岳は心のなかでそつとつぶやいた。

さよなら、と。



再び目を開けた。

視界にはやつらがいた。

岳の覚悟は確かなものになっていた。

一滴の涙がこぼれおちた。それは乾ききった土、いや砂におちた。

いつの間にかインド系の人たちだったひとは徐々に異変を起こし始めた。

「腐っていつてやがる！」

なんと腐り始めたのだ。

それでも歩み寄ってくる。

それはとても気持ちの悪いものだった。

グロテスク。

一言で言えばそうだろう。

内臓が見えるものもあれば目が腐って地面に落ちたやつもいる。

それでも歩み寄ってくる！

しまいには骨が見え出してきた。

まだ肉のついた生々しい骨が。

岳は動けない。

とうとう1人が崩れ落ちた。

周りのやつらも崩れ落ちる。

そして、全員が崩れ落ちた。

骨は瞬く間に砂と同化して消えた。

「うわっ！」

岳は飛び起きた。

まだ状況はつかめない。

あれ？どうなつてやがる・・・

岳は一人で語った。

「夢？」

背中のは汗は気持ち悪いぐらいにかいていた。  
服とべったりくっついていてぬめぬめする。

「た、助かった・・・」

未だに心臓の鼓動がドクドクいつている。

しかし本当に夢なのか。

夢なのに鮮明に覚えていた。

周りを見渡す。

病室？

どうやらあの夜に何かあったらしい。

記憶に従えばUFOにさらわれたはずなのだが。

頭には包帯が巻かれていた。

「いったい何があったんだ・・・」

そのとき扉が開いた。

そして看護婦が駆けつけてきた。

「どうしましたか？」

どうやらさつき起きたときによほど大きく叫んでしまったらしい。

近くにいたようだ。

「い、いえべつに大丈夫です」

「よかった。山名さんがいきなり驚いたように叫ばれた声を聞いたのでびつくりしましたよ。」

「すみません。少し悪い夢を見ていましたから」

「そうですか。でももう大丈夫ですよ。安心してください。ここは病院です。」

「はい。」

岳は安堵の息を洩らした。

しかし本当の恐怖はこれから始まるのであった。

時間が過ぎた。

岳は寝てしまっただらしくはっとなつて目を覚ました。

質問をとりあえずしてみた。

ついでにもう起きたと知らせるためにもだ。

「僕はどうしてこんな怪我をしているんですか？」

「・・・」

看護婦は後ろを向いたまま答えない。

「どうしたんですか？」

「・・・」

明らかに看護婦の様子がおかしい。

岳の声に反応しないどころか身動きひとつしないのだ。

「あの一」

「・・・」

ついさっきまで普通に会話していたのが不思議に思っぐらい看護婦は無言だ。

岳はベッドから体を起こした。

「どうしたんですか？」

「・・・」

岳は近づく。

「聞こえてます？」

「・・・」

そして岳はついに看護婦の顔を覗き込んだ。

それは、生物ではなかった。  
少なくとも絶対に。

「マネキン・・・」

一体どうなってしまうているのだろうか。  
さっきまでふつうに話していたのに…

いつの間にマネキンにすり替わったのだろうか。

もしすり替わっていなかったとしたらさっきの会話はいつたい。

「そついえば他の人は？」

誰もいないはずがない。

岳は勢いよく病室を飛び出した。

走った。走りまくった。

「だれか！だれかいませんかあ！！！！」

もう悲鳴にちかい声だった。

こんな声を出したのは初めてだ。

自分でも驚いている。

のどの調子がおかしい。

いや身体がおかしくなっている。

まるでだれかにエネルギーを吸い取られているようなそんな気がしてたまらなかった。

それとさっきから誰にも会っていない。

会うのは医者のマネキンや病人のマネキンだ。

手術室へむかってみる。そこがまださがしていない唯一の場所だった。

そこがないとするとこの病院には誰もいないことになる。

さっきの看護婦はなぜマネキンになっていたのだろうか。

謎は深まる。

しかし岳は恐怖を感じなかった。

いや感じられなかった。

感じることをできないのだ。何もないのでから。

岳は手術室の扉のドアノブに手をかける。

これが最後の希望だった。

もうここにいなかったら俺はどうすればいいんだ！

そして扉をそつと開ける。

せめて・・・せめて大手術をしていて医師や看護婦が全員手術室にいました、というおちにしてほしい。

していなかったら、希望が終わる。

中が見えた。

しかし、

だれもいない・・・

よく細かいところまで探した。

必死で探した。

「だれかいてくれよお」

応答なし。

そのときぱたりと倒れた。

そして右腕がずきずき痛みだした。

「まさか・・・」

ふくの袖をまくりあげた。

そこには・・・あの夢の中のとくにあったものと同じ十字架になるように浮き出ている黒い点がそこにはあってしまっ  
た・・・

いたみはじょじょに強くなっていく。

「ヴああ・・・ああ・・・」

痛い。異常なくらいに痛む。

そして体が動かない。

足から感覚がなくなってきた。

足を見てみる。

この輝き……

それはマネキンそのものだった。

この時になつて岳はやつと気づいた。

みんなこうやってマネキンにされたのだろう。

だから誰もいなかった。はじめはいたのだ。

自分はマネキンにされていく。

そのとき目の前のパソコンが勝手に起動した。

そこに映し出されたのはあの十字架になるように浮き出ている黒い点だった。

モニタールームにいるある男がいた。

モニターに映し出されているものを見ている。

「ふふふ・・・計画どおりだ」

その男はそうつぶやいた。

「今度こそ・・・今度こそサンプルが手に入るぞ！がはっ！がはははは！！！！！」

そして笑っていた。

「わぁっ！！！」

岳は飛び起きた。

・・・。マネキンになってない？

「どうなってるんだ・・・」

どうやらまた夢らしい。

身体が軽い。

岳ははっとなつて右腕を見た。

あの十字架の模様がなない・・・

「こんどこそ助かったのか？」

そうつぶやいた。

周りを見渡してみる。

いつもと同じ自分の部屋。何一つ変わらない。

その時下の階から声が聞こえてきた。

「岳ちゃんおきなさい」

母の声だった。

「おきてるよー」

「じゃあ下りてきなさい」

「はい」



いつもと全く変わらなかった。

時代以外。

「今日から学校でしょ？」

は？何言ってるんだ。

「もう中学2年生なんだから自分で起きなさい」  
「？？」

ますますわけがわからなくなった。

「中学2年生？」

そついいながら階段から降りた。

「なに寝ぼけているの、あたりまえじゃない」

「えっ？」

「ほらほらはやく朝食食べなさい」

「は、はい・・・」

まったく分からなかった。

とりあえず岳は朝食を済ませた。

「ねえ母さん」

「なに？」

母は洗濯物を干しながら言った。

「いやなんでもない」

言えなかった。言ったらまた夢みたいなことになりそうだからだ。  
もうさんざんだった。

たとえ夢でもだ。

あんな恐怖2度と味わいたくなんてなかった。

岳は中学校に行く準備をしていた。

10年前がよみがえってくる。

「これも夢なのか？」

つい疑問に思ってることを誰も聞いていないのに口に出してしまっ  
た。

元の時代にもどりたい　　岳の頭の中でそういう願いが芽生えてき  
た。

中学校に行くには確か自転車で10分ぐらい走らせたところにある。

「いつてきまーす」

「いつてらっしゃい」

母はやさしい声でそう言った。

自転車を走らせながら岳は考えていた。

そして結果的にこんなことを考えていた。

俺はタイムスリップしたんだ・・・と。

そう考えているとすぐに中学校についた。

ここはZ市立中学校だ。

今日は4月3日、始業式だ。

この時代では。

中学校につき、教室の2・3に入るとみんながいた。幼い姿でだ。

そのとき一人が近づいてきた。

「よう岳！」

岳は少し小さな声でいった。

「よ、よう・・・」

相手は特徴ある肌の黒さ、そして何より髪型がおかしい。そう寺木学である。

どうやら同じクラスらしい。

まあ昔の記憶と何一つ変わらないが。

「どうしたあ？元氣ねえなあ。まあもともとか」  
カチンときた。

「うつせえよ」

「へいへい」

その返事もムカついた。  
がおさえた。

ここでキレると先生や何やらがきて面倒くさい。

特に数学科の先生の赤間秀樹は要注意だった。

俺の記憶によれば、だ。

やはり、タイムスリップしたんだなあ、と岳は改め  
実感した。

「はい席座れー」

そこに先生が入ってきた。

がらりとドアを開け、がらりとドアを閉めた。

みんな一斉に席に座った。

「うつそ最悪」

小声が聞こえてきた。

岳自身も最悪だと思っていた。  
そうあの数学科の赤間先生だった。  
あの地獄の。あの恐ろしい。あのどなり声のすごい。

あの赤間先生だった。

「はあ・・・」

わかつてはいたが少し落ち込んだ。  
それぐらいに恐ろしい先生なのだ。この人は。

どんなに赤間のどなり声を聞いてもなれるものはないだろう。  
その先生のいろいろな話を聞いて1時限目は終わった。

宿題の提出や今後の予定などいろいろ頭が痛くなるほど教えてくれた。

ほとんど頭に入っていないというのに。

赤間先生は予測だがきつとA型だろう。

そう考えている時に学が手まねきをして話しかけてきた。

「ちょっと」

いつもなら聞こえてないふりをするのだが今回は違った。  
真剣な顔をしている。

岳はそっちに向かった。

「何？」

「ここじゃ話しづらい。体育館の裏あたりまで行こう」

岳は言うとおりにした。

体育館裏に着いた。

「で何？」

今度は聞けそうだ。

とその前に岳は付け足した。

「なるべくてつとり早く」

どんなに真剣でも相手はあのMなのだ。

岳は呼ばれた時から少し嫌だったのだ。  
学は口を開いた。

「あの実は  
」  
岳は驚きの現実を知った。

岳は教室に戻った。

さっきの学の話が脳裏に蘇る。

「実はこの世界少しおかしいんだ」

「は？」

「なぜかよくわからないんだけどみんなに話しかけてもシカトしてくるんだ。」

岳は少し笑った。

「それはお前がMだからだよ」  
学は否定した。

「ちがうんだ。お前には俺が見えているかもしれないけれどみんなにはどうしてもおれが見えてないっぽいんだ。」  
学はつぶづけていった。

「それだけじゃない。声もどうやらきこえてないらしい。・・・もしかしたらお前も・・・」

「でも親はおれのこと分かった。大丈夫だよ。」

そう言ったが内心すこし不安になってきていた。  
その証拠に手からうつすらと汗が出てきている。

「いやそれは俺もだ。」

「えっ!？」

「うん・・・」

「じつじゃあ夢はどんな夢を見たんだ？」

「なんか最初はインドみたいところにいた。だけどそこにいる人みんな腐っていった。そのあと確かいつの間にか病院にいた。でもそこもおかしいんだ。みんなマネキンにされてってそのあと目が覚めた。」

・・・。

まったく一緒だ。

もしかしたらこいつは安全・・・？

そして岳は学、いや頼りない学を少し信じてみることにした。

「じつはおれもなんだ・・・」

「えっ？」

学は驚いた。

「まじかよ・・・」

「ああまじだ。」

「じゃあ俺達どうなっちゃうんだ...」

「・・・」

岳は言えなかった。

予想は大体ついていていた。

いや推理と言っておいたほうがいいだろう。

きつと・・・これも夢なんだ。

しかも学と同じ夢を見ている。

誰がこんな夢を見せているんだ？

そう無性に叫びたかった。

岳はそれを抑え冷静に言った。

「とりあえず俺ら以外だれも信じるな。この世界も夢だ。おそらく」

「おう！」

「じゃあそろそろ時間だからもどろうぜ」

学がどうして自分と同じ夢を見ているのか岳はわからなかった。

それとも・・・学も夢の中の仮想の人物なのか？

意味が分からず岳は体育館に行く準備をしていた。

次は始業式だ。

とりあえず準備をするものが思いつかなかったので筆記用具とメモ帳をポケットに突っ込んだ。

そして岳は体育館にむかって歩きだした。

かすかな希望を持って。



## 11（前書き）

いやあ

書き続けていたらいつの間にか11まで書いていました。  
最初は5ぐらいで終わると思っていたんですが^^

体育館についた。

岳はそこに並んでいるイスの一つに座った。

しばらくするとマイクを持った人が現れ前に歩いてきた。

「それではこれから始業式を始めます」

その人は間もなく去り、代わりに老いた男の人が現れた。

校長だ。

あごには白いひげが10センチメートルほどあり右目の横に大きなほくろがある。

校長にみんなは、春休みは楽しかったかと勉強についてさんざん聞かされた。

岳が2番目に嫌いな人だ。

そして30分ぐらいの相当長い校長の独り言がようやく終わり深呼吸をした。

「やっと終わった。」

岳がそうしていると、先ほどのマイクを持った人が再び現れた。

「それではこれで始業式を終わりにします」

その途端、皆は一斉にしゃべりだした。

「やっと終わったよ」

「うんうんめっちゃ長かったもんね」

そういう話が耳に入ってきた。

しかし岳には話し相手が近くには一人もいなかった。

なぜだろう・・・誰も話しかけてこない・・・

そつえば朝来た時も学以外話しかけてきた人は一人もいなかった。やはり学が言ったとおりなのか・・・

学を探してみる。

が、学の姿はなかった。

「あれ?・・・」

いくら探しても学の姿が見当たらない。

そうこう探しているうちに先生、いや赤間がみんなに指示してきた。

「よし教室にもどるぞ」

その声を聞いた生徒たちは教室へ戻っていく。

その生徒たちにつられて他の生徒たちも戻っていく。

岳もとりあえずは戻った。

なぜだろう？ 妙に胸騒ぎがする。

岳はもうあの恐怖を二度と味わいたくなかった。

まさかこれもその恐怖を味わされる夢の一つなのか。

岳は教室につくと必死になって学の姿を探した。

しかし見当たらない。

それでもあきらめずに探す。探しまくる。探して探して探しまくる。

それでも見当たらない。

岳は学の言葉が脳裏に蘇ってきた。

「実はこの世界少しおかしいんだ」

もう一度蘇ってきた。

「ジツハコノセカイスコシオカシインダ」

岳ははっとなって新しい座席表を見る。

少し遅れてきたので岳は見る必要がなかった。

なぜなら空いている席は一つしかなかったからだ。

しかし何か嫌な予感がした岳は確かめに座席表をみてみた。

そこには自分の席は

あった。

岳は少しほっとして席に戻った。

そこへ先生が入ってきた。

「よし席座れ。給食の時間だ。」

そつえばいつの間にか腹が空いていた。

学のことで気付かなかったのだろう。

岳はみんなが給食の支度をしている間時間があるのでトイレに行こうとした。

「おや？どこに行くのかね？」

岳はびくりとした。

今のは赤間の声だ。

「キュウシヨクガニゲチャイケナイダロウ？」

・・・???

給食？

岳は自分の姿が赤間に見えていることより給食のことに驚いた。

「きゅ、給食？」

赤間是不気味な笑みをした。

「ソトオリダ。オマエハワレワレノキュウシヨクダロウ？」

はあ？何言ってるんだこいつ・・・

赤間の周りにいつの間にか生徒たちが集まってきた。

「どういうことだよ・・・」

そいつらは不気味な笑みを浮かべた。

「オマエハワレワレノシヨクリヨウダ」

「ソウダソウダ」

「・・・」

なにもいえなかった。

ただ一つだけわかったことがある。

それは

こいつらが敵だということだ。

しかも全員。

岳は学のことを思い出した。

「じ、じゃあ学はどうしたんだよ!!」

すぐに返事は返ってきた。

「タベタ」

岳は震えあがった。

恐怖よりも先に憎しみが出てきた。

「けんじゃねえ」

「キコエナイナ」

「ふざけんじゃねえ!!!!」

そいつらは笑った。笑いまくっていた。

「フザケテナドナイ。カトウセイブツハクワレル、ソレガアタリマ

エデハナイノカイ？」

下等生物？

その時岳はすべてがわかった。

学と俺が無視されていたことが。

それはこの世界では俺らは下等生物なのだ。

つまり豚や牛のようなものなのだ。この世界では。

岳の脳内で学が現れこう言った。

「実はこの世界少しおかしいんだ」

学の言っていたことは決して偽りでも何でもなかった。

真実だったのだ。

「つく・・・」

岳はこいつら、いやこの人間の形をした化物を憎しみのこもった眼で睨んだ。

「ククク、ニラマナイデクレナイカナ？モウスグクワレルトイウノ  
二」

そう化物は言ったが岳には聞こえなかった。

そしてにやけた。

「死ね」

そう言い残し岳は思いっきり赤間の姿をした化物にパンチをくらわした。

その途端にその化物は吹っ飛んだ。

「キサマ・・・」

他の化物の目が一斉に殺意の芽生えた目にな変わった。

しかしそれに構わず岳は暴れる。

それに見かねて一人、いや一体の化物はナイフを持ちこちらに向けた。

「ソツチガシネ」

ブスリ

「うヴああああ・・・」

岳は背中になにか刺さったのを感じた。

それを抜き取る。

とたんに血がどくどくと出てきた。



しかしきれてしまった。

「チッ」

その男はすぐに準備をし終えるところへ向かった。



岳ははっとなり自分が生きていることを確認した。  
生きている？

それを確かめるために目を開けた。身体を横にそらそうとしてみる。  
しかし身体が動かない。いや動けないのだ。  
汗が手からじんわりと出てくる。

「・・・ここはどこだ？」

岳はもがいた。やはり動けない。  
なぜ動かないか。すぐに分かった。

目を開けたその時からわかっていた。

「なんだよこれ・・・。」

手や足や腹がくさりで縛られている。

そつとあたりを見渡す。どうやら飛んでいるようだ。

窓のようなところから空が見える。暗い夜空だ。

壁を見る。白い。それは、触ってみると吸い込まれそうなくらい白かった。

目を再びつむつた。

そして目を開けた。何か走る音が聞こえてくる。

すると白い壁の一部が開きある人物が走り寄ってきた。

「・・・学！」

学はぜえぜえと息を荒らしていた。

「岳・・・ここから はあはあ・・・逃げるぞ!!」

そういつて学はカードキーのようなものをどこかに差し込んだ。  
それと同時に鎖がほどけた。

これで動けるようになった岳は学にいるいる聞きたいことがあった。

「学、どこだここ・・・。」

岳が冷静なのに対し学はかなり焦っていた。

「いまはそれどころじゃない！話は逃げてからだ！ついてこい!!」



まずい・・・もしサンプル01がサンプル02に真実を話してしま  
つたら計画は完全に失敗に終わる。それだけは阻止せねば！！  
おそらくサンプル01はもう気づいているだろう・・・

この世界が ではないことが・・・

男は立ち上がり再び走り探し出した。

計画を成功させる、それだけしか男の頭の中にはなかった。

「俺は

学は岳に今までであったことを話した。」

時は昨日の夜の8時少し前。

学は夜道を何の当てもなくふらふらと歩いていた。すると何かの飛ぶ音が聞こえてきた。

「・・・。」

何か真上にいるな。

そう思った学はいきなり逆走しだした。

何となく嫌な予感がしたからだ。

そして上をそつと見上げる。

上には何かが浮かんでいた。

「なんだあれ・・・。」

学の後を追うように何かはゆらりゆらりとこっちに移動してくる。

学は今度は全速力で走った。

直感的にあれば俺を狙っていると思ったからだ。

しかし何か、いやUFOは間が開くどころかどんどん縮んでいく。

そして意味不明な光をあてられた。

ふわり

学はUFOに吸い込まれていった。

吸い込まれている間に意識が少しずつ遠のいていく。

まずい！気絶するな！気絶するな！気絶するな！気絶するな！気絶するな！気絶するな！

気絶するな！気絶するな！気絶するな！気絶するな！気絶するな！気絶するな！

永遠に心の中でそう唱えていた。

気がつくとも学は横になっていた。

声が自分の上のほうからする。誰かがいる。

学は動けたので思いつきり足を上に振り上げた。

足に何かがぶつかった。

そして倒れる音が聞こえてきた。

「き、きさま・・・」

学は眼を開け勢いよく起き上った。

目の前にはさつき学が蹴り上げたらしい男の人が座り込んでいた。

右目を押さえている。おそらくさつき蹴った場所が右目だったのだろつ。

そこから血がぼたぼたと流れていた。

その男が立ち上がるうとしたその時に学はもう一度けりをくらわせた。

今度はかかと落とした。

男は避けようとしたが避けきれず肩に直撃した。

「うう・・・」

バタリッ

男の人は倒れこんだ。

「ここはどこだ？」

まったくもってわからなかった。

とりあえず考えても仕方がないので学は気絶している男の人のポケットやらなんやらを探ってみた。

見つけたものは3つ。

ここの地図らしきものとカードキー、そして計画書だった。

学はその計画書を一通り見てみた。

そこにはこう書かれていた。

### サンプル採取計画書

われわれの超人間作成にはまず人の心臓と脳のサンプルが必要だ。

そのためわれわれは寺木学と山名岳をサンプルとして捕獲する。

寺木学・・・サンプル01

山名岳・・・サンプル02

しかし計画を成功させるには難しすぎる。

なぜかという、その心臓や脳を取り出すときにサンプルが暴れてしまえば傷ついてしまい使い物にならないからである。

麻酔を使うと脳と心臓がサンプルとして使えなくなるので麻酔は使ってはいけない。

そのためにホリユアー氏が開発した（現実夢混乱機）というものを利用してサンプルに現実を夢と勘違いさせることによって暴れさせないようにするのである。

責任者：井川純一（日）

第二責任者：ホリユアー（米）

「・・・なんだこれ。ふざけてんのか・・・」  
学の目には一筋の光がさしていた。

と、そのとき警報がなった。

ルルルルルルルルルルルルルル！！！！

まずい。おそらくばれてしまったのだろう。

学は急いで地図を見た。

ここからそう遠くないところに岳のいる部屋がある。

「いたぞー！」

部屋から出ると男の人が駆けつけてきた。

その声に反応して学は一目散に逃げた。

「ま、まてー！！！」

学は走るのにはかなり自信がある。

なぜなら、昔サッカー部だったからだ。

3分もしないうちに男の人の姿が見えなくなった。

「なんだどうってことないじゃないか。」

学は今度はゆっくり歩き出した。

声がしてくる。

その声がしてくる場所をそつと見てみるとケータイで男の人が誰かと話していた。

隠れてその会話を聞いてみる。

「です！！・・・サンプル01が逃走しました。・・・はい。

ついさつき見たところいなくなっていました。」

それを聞いて学は反射的にその男の人を思いっきり蹴り飛ばしていた。

その男の人は叫び声をあげて倒れた。

起き上がらないのを学は確認するとケータイを踏みつぶした。

「くそが・・・」

そう吐き捨て、学は岳のいる部屋へ向かった。

あと、ここを曲がればすぐそこだ。

その角を曲がり学は岳のいる部屋に入った。  
いつの間にか疲れてきていた。

「ということなんだ。」

すべてを話し終わると学は深呼吸をし、倒れこんだ。

「お、おい大丈夫か？」

「大丈夫だ。少し休ませてくれ。」

「わかった。」

どうやら学は相当疲れているようだ。

いままで学の疲れているところをあまり見ていないので、岳は少し驚いた。

1分後。

学は立ち上がった。

「よしもういくぞ」

学が立ち上がると岳も一緒に立ちあがった。

男はにやりと笑いながらケータイで誰かと電話していた。

「仕方がない。プロジェクトAからプロジェクトEに変更だ。」

ケータイをきった。

「少し手荒だがこれなら確実だろう。そのためにわざとサンプルをわざわざ2体用意したのだ。」

と、その時再びケータイがなった。

「なんだ？」

相手が静かな口調で言った。

「見つけました。サンプル01とサンプル02はともに行動しているようです。まだこちらに気づいていません。どうしますか？」

男は少し間を開けてこう言った。

「サンプル01の。お前の腕ならできるはずだ」



「わかりました。」

そして、ケータイをきった。

この世界が夢ではないことがサンプルにばれるのはまずい。だがプロジェクトEなら大丈夫だな。ふふふふ・・・  
そして男はサンプル採取室に向かった。

男は拳銃を手に持った。

さっきあの人が言っていたことが脳裏に蘇る。

（サンプル01の心臓を狙って拳銃で撃て。お前の腕ならできるはずだ）

男はすぐ近くにいますがまったく気づいていないものにそっと拳銃を向ける。

心臓めがけて・・・

「よしもういくぞ」

岳は学が立ち上がるのを見ると一緒に立ちあがった。

どうやら学の疲れはもうないらしい。

やはり学は、運動神経だけはかなりいい。

ただMということだけが残念だ。

学のMということを抜けばあとは完ぺきなのに・・・

そう思いながら学の横に移動して走った。

バンッ

ドサッ

銃声と同時に倒れた音がした。

倒れたのは学だ。胸のあたりが真っ赤に染まっている。

「うう・・・げほっげほっ！！！」

岳は周りに警戒しながら、しゃがんだ。

「お、おい！学！！大丈夫か？」

それに学は弱弱しく答える。

「も・・・う・・・だめ・・・だ・・・」

「だめじゃねえ！！がんばれ！死ぬなよ！！」

そういいながら岳はなにか手当てできそうなものを探した。しかし見つからない。



「はあ？」

「殺してやるっていつてんだよおおおおおおおおおお  
おおおお！！！！」

そういつて岳は振り向く。

「な・・・」

岳は言葉を失ってしまった。

「ふふふ・・・そんなにおどろいたのかい？」

「うそ・・・だろ？」

「うそではない。ふふふ・・・」

目の前にいるのは男が2人だ。

片方はどうでもいい人だ。

だがもう片方は・・・

「井川純一・・・！！！」

そう目の前にいる人のうちの片方はコンビニのあの店長なのだ。

その時、すべてがつかなくなった。

「すべて・・・わかったよ」

「ほう？いつてごらん」

岳は店長、いや井川を睨みつけながら話した。

「おまえは俺がコンビニを止めると言いに来る前に誰かと話していたな。」

「ああ。」

「その時俺は聞いていたんだ。そのお前とホリユヤーの会話を！！」  
井川の眉がぴくりと動いた。

しかし再び元に戻る。

「そのときおまえはサンプルがどーたらこーたら言ってたな。」

「ああその通りだ。サンプル02」

「おそらくその時に8時に俺をおそうことが決まった。それと学も・  
・・」

「よくわかったね。」

「・・・。」

岳が黙り込むと井川が岳にこういった。

「つづけたまえ」

少しの間の後、岳はつづけた。

「あのUFOみたいなものはアメリカでつくられたものだな？」  
びくり

また井川のみゆが動いた。

「証拠は？」

「あの計画書をみたらホリユヤーはアメリカ人らしいな。ホリユヤーは夢現実混乱機というよくわからないものを作るくらいだ。こういう乗り物ぐらい簡単だろう？それとアメリカで極秘で作っているとテレビでも見たことがある。それで」

「君の推理は見事だ。もういい聞き飽きた」

「てめえ・・・」

岳の殺気溢れた視線を井川は全く気にせずに隣にいた男にある命令をした。

「こいつの脳を狙って打ち殺せ」

岳は半ばにやりとあざ笑った。

「ばかなこというぜ。計画書を書いたのはお前だろう？ここで俺を殺してしまえばサンプルは手に入らなくなる。」

「ばかは君のほうだよ。サンプル02」

「なんだと・・・」

「君はまだ知らないことがあったんだよ。」

井川はつづけた。

「その計画書がプロジェクトEではなく、プロジェクトAを記していることを」

「プロジェクトE？」

岳は真剣な顔に戻る。

「そうだ。ふふふ・・・しかたがない。君はどうせサンプルになるかな。特別に教えてやろう。この計画はそもそも心臓と脳が手に入ればいいのだ。それとサンプルは2体いる。ということは片方は心

臓だけ、片方は脳だけ完全な状態で手に入れたいのだ。・・・ふ  
ふふ。もうわかったな。」  
岳に殺意よりも恐怖が芽生え始めた。

無意識的に岳は、後ずさりをしていた。

コン

頭になにかが当てられた。

振り向く。岳は震えだした。

「そこまでだよ」

井川がそつと歩み寄る。

もう後ずさりはできない。

さつきから頭に当てられているのは銃口だからだ。

もう俺は死ぬのか？

そうおもっている口が勝手に動いた。

「おれは・・・」

「ん？」

「おれは、死んでもあんたらを許さない！！！！！！」

「遺言かい？」

岳は少し間を開けて言った。

「ああ！！！！」

井川はそれを聞くと表情が一変した。

「うて」

それは低い声だった。

バンッ

井川は岳の死体を見下ろしていた。

「無様だ・・・」

岳の頭は血まみれになっており、脳みそが少し飛び出していた。

「斎藤、見事だ。」

井川は銃で岳を撃った男にそう言った。

「ま、こんなもん金さえあれば楽勝だよ。」

「そうか・・・よしこいつらの脳と心臓を取り出して、保管しろ」  
そう井川が命令すると斎藤、斎藤龍は元岳がいた部屋に二人を持って行き、ポケットからナイフを取り出した。

「まずはお前からだサンプル02」

ナイフをサンプル02の胸に当て、勢いよく切りこんだ。  
ぶしゅ

血が飛び散る。

そして、そこから心臓を取り出した。

動脈や静脈を切り落とし、液体の入っているビンの中に入れた。

「次はお前だ。サンプル01」

斎藤は今度はチェンソーを取り出した。

それに電源を入れる。

それと同時に刃が回りだした。

「終わりだ。」

斎藤はそれを頭に当てようとした。

しかしその時、けりが自分の手に当たった。

チェンソーを落としてしまった。

「いつ!？」

そのけりは、サンプル01のものだった。

「斎藤、おまえにおれはころせない」

??????

生きている。

どうなっているんだ？

「き、貴様!!なぜ生きている。」

「残念だったな。俺は元から死んじやいねえよ」

「な・・・」

「本当のことを話してやろうか？」

そう言いながらサンプル01、いや学はチェンソーを拾い上げる。

「この血を試してみる。」

つづける。



「これは・・・トマトジュースだ。それもかなり濃縮されたね。」  
「！！！」

斎藤は何も言えなかった。

「それにおれは実は防弾チョッキを着ているんだ。気付かなかったかな？」

「どういうことだ・・・」

学は不気味に微笑む。

「まだ分らないのかい？僕は今までずっと芝居をしていたんだよ。」  
「・・・。」

「そしてサンプル01は僕ではない。」

そういつてゆつくりと確実に近づいてくる。

斎藤は動けない。

「サンプル01はきみだよ。斎藤君」

「・・・うそだ」

「嘘じゃないよ？君はずっと利用されていたんだ。それとね・・・」  
学の顔が真剣になる。

「よくも岳を殺してくれたね・・・」

「・・・。」

チェンソーが頭に向けられた。

「僕はもう許さないよ。いや許せない！！」

「助けて！！しにたくねえーよお・・・」

「もうおそい」

学は斎藤、サンプル01の頭をチェンソーで切り裂いた。

そこから丁重に脳を取り出し、液体の入ったビンの中に入れた。

## エピソード

ドアが開き、井川が入ってきた。

「プロジェクトEは成功だよ」

「・・・いや失敗だ」

「何？」

井川は眉間にしわを寄せる。

「岳がしんだ」

「・・・仕方がないことだ。まさかサンプル02が撃つとは思わなかったからね」

そこへ、また誰かが入ってきた。明らかに、外人だ。

「オシバイジョーズダッタヨ」

そこに入ってきたのは、ホリユヤーだった。

ホリユヤーは拍手をしながら、歩み寄ってきた。

学が落ち込んでいるのを見ると、ホリユヤーはこう言った。

「ダイジョーブダ。タカシノ、ノウノコピーハトツテアル」

学の目が大きく開いた。

「ほ、本当か!？」

「アアホントウダトモ。コレデコピーニンゲンヲツクレバイイ」

「ははは・・・よかったな、我が息子よ」

「ふう・・・よかったよ・・・」

「キミハホントウニユウシユダヨ。Mr・マナブイカワ。」

寺木学、いや本当の名は井川学だ。

今まで、ずっと寺木だと名乗っていたが、本当は井川であり、井川純一の

息子である。

岳やみんなには悪いと思っていたが、今までずっと嘘をついてきたのだ。

まあ仕方がなかったのだが。

学は胸が高鳴った。

「で、いつコピーしたんだ？」

「ユメヲミセテイルトキダヨ。」

「そうか。確かにコピーできるな。」

しばらくそという話が続き、学は血に染まっている手を水で洗い流しにいった。

「これで・・・やっとすべてがおわった。」

すると、隣にいた純一が首を振った。

「まだだ。まだミュータントを作っていない。」

「あ、そっか。そういえば、ミュータントって何体作るの？」

「サンプル02と山名岳の2体だ。」

「どのぐらいで、できる？」

「3年ぐらいだろう」

「3ねんかあゝ。・・・長いな」

「はははは、2体作るにはだよ。1体作るには半分の1年6か月だ。」

「でもながいよ」

「がまんしろ」

「・・・ちえ」

学は聞こえないような小さな舌打ちをし、1年6か月後を想像していた。

続く

## エピソード（後書き）

この話には続きがあります。  
タイトルはミュータントベイビーです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4397g/>

---

ユー・エフ・オー UFO

2010年12月4日05時47分発行